

私の出会った人

(その十)

関屋 啓子

その人は、小柄な元気なおばあちゃんだった。ベッドに横になっていたが私が訪問すると起き上がり正座して話を始めようとされる。

「正座はやめてベッドに腰掛けましょうか。私もそうさせてもらいますから」と言って、並んでお話を聞かせてもらった。

今日が2回目やねえ。お顔覚えてるよ。来てくれてありがとう。

今日、外は寒いのか？

そうか。ここにいると外が寒いのか暑いのかわからんのですわ。

私ね。生まれて育ったのが舞鶴なんです。雪もよう降るからね。今頃になると引き揚げのことを思い出すわ。私の兄もお父さんも引き揚げてきたしなあ。お迎えに行った。お父さんはシベリアに連れて行かれて大変やったとよう言うてた。近所の人たちも「よう生きて帰って来たなあ〜」って言うてやった。そやけど、うちらには詳しいことは何もしなかったよ。思い出したくなかったんやろね。

家は少し高い所にあってなあ。私らはよく裏山に登って港を見ていたもんや。船から板が渡されてなあ。その栈橋を兵隊さんが降りてくるのが見えたんや。迎えの人もたくさん来てはったんやで。

それでも迎えの無い人もあってなあ。そんな人が私の家に泊まっていったこともあったわ。

お母ちゃんは兵隊さんに食べてもらうものを集めるのに苦労してたわ。

そやけど、お互いやしな。近所の人たちが食べ物を色々持って来てくれたよ。

あの頃は、何かと言っては近所で助けおうてたなあ〜。

今はみんなそれぞれやろう。何が違ごうてしまったんかなあ。

でも懐かしいなあ。昔のことはなんでもよく思えるのかな。

予定の時間が過ぎたので、次回を約束して退室した。

戦後の話に終始したが、かなり詳細な情景描写だった。父親や兄たちが誰も欠けることなく生還されたことはあの時代では希有な出来事だったのであろう。その嬉しさをたくさん話してくださった。

それだけに迎えの無い兵隊さんを泊めて歓待したと言う母親や近所の方々の話は心にしみた。

この方はいつも話の中で「人に喜んでもらえて嬉しかった」と言われる。このような感じ方は、昔ご家族がすでに実践されており、それを当たり前のこととして受け入れて育

って来られたからかなあ〜と思いつつ聴いた話を反芻した。とても深い話を聞かせていただき感謝している。もう少し、続けて聴きたい。